

8408 ワシントンの秋は、美しい。・・・

ワシントンの秋は、美しい。

小(プチ)パリとして設計されたこの都市の、放射線状に伸びる街路沿いの欅や銀杏やプラタナスが、しっとりと色づいてきて、深みのある落着いた雰囲気をかもしだす。

だが、この年——1941年(昭和16年)秋のワシントンは、そうした街のたたずまいとは裏腹に、太平洋戦争の開戦前夜の緊迫した空気につつまれていた。

柳田邦男『マリコ』

[許容訳例]

Washington is beautiful in autumn. Designed as a *petit Paris*, the city has avenues radiating in all directions, along which the zelkovas, ginkgoes and plane trees gradually turn yellow and brown, producing a profound and calm atmosphere.

But in that year—1941 (the 16th year of Showa)—Washington in the autumn was, in spite of the calm appearance of its streets, filled with a tension caused by the imminent outbreak of the Pacific War.

[翻訳例]

Autumn is beautiful in Washington. The zelkovas, ginkgoes and plane trees lining the radial avenues of the city, which was designed as a “little Paris,” gradually take on gracefully sober hues, evoking an atmosphere of profound tranquility.

This year, however—1941, the 16th year of Showa—Washington in the autumn was enveloped in an air of tension, arising from the imminent outbreak of the Pacific War, that belied the peaceful appearance of its streets.

■ワシントンの秋は、美しい。(8408)

★「ワシントンの秋」は autumn in Washington でいいのですが、動詞が使われると、in Washington は場所の副詞句なので、文末に置くことも可能です。

★「美しい」は beautiful が一番いいでしょう。pretty も使えないことはありませんが、非常に規模が小さい感じになってしまいます。splendid は「非常に面白い」という意味でも使われますし、かなり主観的な感じになります。

●文技巧(ワシントンの秋は美しい)

「ワシントンの秋は美しい」に対する英文としては三つの文が可能です。英文としては Autumn is beautiful in Washington. が最も自然です。Autumn in Washington is beautiful. は日本語に引きずられた感じの英語です。Washington is beautiful in (the) autumn. は日本語の意図とは必ずしも一致しない場合もあります。たとえば、「(秋には一斉に掃除をするので)ワシントンの秋は美しい」という意味にもなりかねません。なお、autumn に定冠詞を付け

るかどうかは個人の好みですが、定冠詞を付けた方が無難です。日本語の〔の〕は連体修飾節を端折るのによく使われるのでちょっとやっかいです。たとえば、「銀座の柳」(存在の場所)は「銀座(通り)にある柳」ですし、「僕の家」(所有者・居住者)は「僕の住んでいる家」、「花の都東京」(比喩)は「花のように華やかである街東京」など。このうち「存在の場所」を表す〔の〕は in Washington のように場所の副詞句で処理することができます。そうすると、英語では「情報素の基本配列」で「場所の副詞(句)」は動詞の後・時の副詞より前(e.g. I went to Kamakura yesterday.)になりますから、「ワシントンの秋は美しい。」に相当する英語としては Autumn is beautiful in Washington. が一番自然なのです。ただし、副詞句ですから配置は自由で Autumn in Washington is beautiful. も可能となるのです。参考;「伊勢〔の〕風は意外と冷たくびしい。」The breeze at Ise was unexpectedly, uncomfortably cold. /The breeze was unexpectedly, uncomfortably cold at Ise. 「なにか眠くなるような、のどかな夏〔の〕生活だった。」Life in summer was peaceful here, almost somnolent. /Life was peaceful here, almost somnolent in summer.

■小(プチ) パリとして設計されたこの都市の、放射線状に伸びる街路沿いの欅や銀杏やプラタナスが、しっとりと色づいてきて、深みのある落着いた雰囲気をかもしだす。(8408)

★「小(プチ) パリ」は、日本語の「プチ」(フランス語の *petit*)に合わせて a petit Paris でもいいですが、いくらか気障な感じです。a little Paris とした方がいいでしょう。

★「～として設計された」は be designed as ～です。

★「この都市の・・・」は this city とするには及びません。「この都市」すなわち Washington はすでに話題にのぼっているわけですから the city で十分です。

★「放射線状に伸びる」は (the avenue) radiates (in all directions) という動詞が使えます。

★「・・・沿いの」は along (the road; the street)ですが動詞 line を使うと「・・・が・・・に(一列に)並んでいる」(e.g. Ginkgo trees line the avenue. / Many people lined the sidewalk.) となります。cf. The avenue is lined with ginkgo trees.

★「欅や銀杏やプラタナス」は (the) zelkovas, ginkgoes and plane trees です。

★「しっとりと」は、なかなかぴったりした表現がないのですが、「落着いた・派手ではない」(sober)という感じなので gracefully sober (hues) がいいと思います。

★「色づく」は become coloured とか turn color だけでは感じが出ませんので take on sober hues という表現がふさわしいと思います。

★「(色づいて) くる」には「ゆっくりと・だんだんと」の感じがあるので gradually (take on) と副詞を加えたいです。

★「深みのある落着いた雰囲気」は難しい。「深みのある」と「落着いた」という二つの修飾語が「雰囲気」についてのものと解釈すると profound and calm atmosphere ですが、「深みのある」は「雰囲気」に懸かるのではなく「落着いた」を修飾している、つまり「ただの落着きではない、深みのある落着き」だと言っているように思われます。とすると、profound and calm atmosphere ではなく calm yet profound atmosphere としたほうがいいのではない

かと思います。ただ *profound* も *calm* もなんとなくぴったりしない感じがします。 *calm* より *tranquil* (e.g. the *tranquil* October air 穏やかな十月の大気) の方が、精神に訴えてくるような感じがします。ですから、*an atmosphere of profound tranquility* とすれば、もっと意味が通ると思います。ただし *profound* も気になります。『ジーニアス和英』では「深みのある」に *profound* を出しているのでたぶん使って差し支えないと思いますが、この言葉は、たとえば *profound sleep* (深い眠り) のように使われて「深みのある」ではないです。「深みがある」の訳としては *It has [There is] depth.* という言い方がありますが、ここでは使えそうもありません。『英和イディオム完全対訳辞典』(マケーレブ・岩垣編著・朝日出版社) では *My father was a deep man of few words.* を「父は寡黙で深みのある人間だった」と訳しています。ですから *deep* が使えるかなと思うのですが、残念ながら *tranquility* に *deep* の付いた例を持ち合わせておりません。

★ 「(雰囲気を) かもしだす」は *produce* も使えますが *evoke* もいいです。 *evoke* は、たとえば、*evoke a memory* とか *evoke the past* のように使い、本来の意味は *call up* とか *call out* ということですが、ここで使うとちょっと poeticな感じが出ていいのではないか。あるいはもう少し散文的な普通の言葉を使うとすると *create* などもいいと思います。

●文技巧 (隠れた論理をすくい上げて訳す)

「小(プチ) パリとして設計されたこの都市の、放射線状に伸びる街路沿いの櫻や銀杏やプラタナスが、しっとりと色づいてきて、深みのある落着いた雰囲気をかもしだす」の文は、そのまま簡単になると、「この都市には、街路沿いに・・・があって、秋になるとそれが色づく」(The city has the avenue, along which (the) trees gradually turn yellow and brown in autumn.) ということですが、これでは、最初に「ワシントンの秋は、美しい」と述べた表現との関連がはっきりしません。選ばれた日本語の表現を結び合わせると「ワシントンの秋は、美しい、(なぜならば) この町の放射線状の街路には・・・が並び、それらが色づいて・・・な雰囲気を醸し出す(からである)」という論理性が隠されているように思われます。隠れた論理を目にするように書くのが英語の特徴ですから、*because* などという因果関係を表す【関係性指標】を使わずに、さりげなく論理的に情報を結びつけなければなりません。そうすると、

(なぜならば)

- ① プチパリとして設計されたこの町は→「連体修飾節+特定体言」→「特定名詞(the city)+関係詞節(, which was designed as a little Paris)
- ② 放射線状の街路に沿って・・・が並び→...trees which line the avenues of the city
- ③ それらが色づいてきて→they gradually take on gracefully sober hues
- ④ ・・・な雰囲気を醸し出す→evoke an atmosphere of profound tranquility

(からである)

となります。①と②では *the city* が、②と③では *trees* と *they* が共通項になります。それか

ら③と④との関係は「…してき[て]…する」で、典型的な「主動詞(take on) + 句(evoking)」です。したがって、

The zelkovas, ginkgoes and plane trees which line the radial avenues of the city, which was designed as a “little Paris,” gradually take on gracefully sober hues, and evoke an atmosphere of profound tranquility.

↓

(The) zelkovas, ginkgoes and plane trees which line(→lining) the radial avenues of the city, which was designed as a “little Paris,” gradually take on gracefully sober hues, and evoke(→evoking) an atmosphere of profound tranquility.

とすれば、Autumn is beautiful in Washington.の理由を説明出来ることになります。

■だが、この年——1941年(昭和16年)秋のワシントンは、そうした街のたたずまいとは裏腹に、太平洋戦争の開戦前夜の緊迫した空気につつまれていた。(8408)

● [だが] (逆接)

[だが]は「逆接の〔関係性指標〕」ですから but で間違いないのですが、英語では but を改行の先頭に置くことを嫌います。however か though を使う方が無難です。ただし、ここでは文脈で「逆接」が予想できるので、〔関係性指標〕を使わなくてもいいと思います。

★「この年」は This year…でいいですが、回想的に In that year でも構いません。

★「1941年(昭和16年)」は 1941(the 16th of Showa)でもいいと思いますが、普通は 1941, the 16th of Showa あるいは 1941, the 16th year of the Showa era です。

★「秋のワシントン」は Washington in the autumn でいいと思います。

★「そうした街のたたずまいとは裏腹に」は in spite of the peaceful [calm] appearance of the streets とも書けますが、A belie B (AがBを裏切る) という動詞を使っても書けます。この動詞は、たとえば、His trembling hands belied his calm voice. (落ち着いた声とは裏腹に彼の手は震えていた) (『ガンダムハウス英語辞典』) とか The result belied his father's expectation. (結果は彼の父の期待を裏切るものだった) ように使いますから、ここでは、an air of tension belied the peaceful appearance of the streets (静かな街のたたずまいとは裏腹なに空気は緊張していた) のように使います。believe の他には contrast strongly with という表現も使えます。なお、in spite of の代わりに for all は使えますが with all は無理です。これは「もってしても」の感じ。ですから、たとえば、With all his good looks, he is unsuccessful with the women. は Although he has such good looks, he is unsuccessful with the women. であるのに対して For all his good looks, he is unsuccessful with the women. は In spite of his good looks, he is unsuccessful with the women. です。

★「太平洋戦争」は the Pacific War です。

★「開戦前夜の」ですが、「前夜」には、よく eve を使うので、「太平洋戦争の開戦前夜」は on the eve of the Pacific War となるように思われますが、英語としては何か不自然な感じがします。この英語ですと、その時点で誰もが Pacific War 開戦の前夜と知っている(て、その

ために緊張してい) ることになるのです。たとえば、みんなクリスマスを知っていて、誰もがその「前夜」を知っているのと同じ感じになるのです。つまり、直訳するのは無理なのです。そこで「差し迫った・一発触発の」という意味の *imminent* を使って the imminent outbreak (of the Pacific War)とするといいと思います。なお、ここで outbreak の代わりに opening を使うのは違和感があります。

★「緊迫した空気」は *an air of tension* でしょう。

●[の] (動詞を端折る隠れ連体修飾節の[の])

「太平洋戦争 [の] 開戦前夜[の]緊迫した空気」の [の] はいずれも「動詞を端折る隠れ連体修飾節 [の]」です。前の [の] の動詞は動作名詞 *outbreak* の中に吸収されています。後の [の] は「開戦前夜に生じる緊迫した空気」ということで *an air of tension which arises from the imminent outbreak of…→an air of tension arising from…*です。すでに述べたように「関係詞+現在時制」は…*ing* で表すことができます。なお、*arising from* の代わりに *inspired by* も使えます。この *inspire* は「生じさせる」という意味です。

★「つづまれていた」は *filled with…*でもいいですが、*enveloped; wrapped* も使えます。ここでは *enveloped in an air of tension* が一番合うように思います。